

宗教と倫理

別冊 第1号

第2回学術大会特集号

はじめに	3
特別講演	
加藤尚武 「環境と宗教は関係あるか」	4
質疑応答	18
公開討論会 「エコロジーと宗教」	
澤井義次 「宗教的自然観 東洋と西洋」	24
小原克博 「エコロジーと宗教の関わり」	28
質疑応答	31

宗教倫理学会

2002年(平成14年)10月

Religion and Ethics

Separate Volume 1

THE SPECIAL REPORT OF THE SECOND CONGRESS Kyoto, November 2001

Special Lecture

Does Ecology have something to do with Religion?

Hisatake KATO, Tottori University Of Environmental Studies 14

Discussion 18

Open Discussion 'Ecology and Ethics'

View of Nature from the Religious Perspective: in the East and West

Yoshitsugu SAWAI, Tenri University 24

Relationship of Ecology and Religion

Katsuhiro KOHARA, Doshisha University 28

Discussion 31

JAPAN ASSOCIATION OF RELIGION AND ETHICS
October, 2002

はじめに

宗教倫理学会 第2回学術大会は、2001年11月11日(日)、キャンパスプラザ京都を会場として行われました。それまで「エコロジーと宗教」をテーマとして、研究プロジェクト委員会主催の研究会が6回開催され、学術大会は、そうして積み上げられてきた研究の成果を発表する場にもなりました。

第2回学術大会では、午前に個人研究発表を行い、午後に加藤尚武氏を講師とした特別講演と、「エコロジーと宗教」をテーマに公開討論会を行いました。いずれも活発な質疑応答がなされました。こうしたプログラムの中で得られたものを、さらに今後の研究に活かしていくために、『宗教と倫理』別冊第1号(第2回学術大会特集号)を編集した次第です。

宗教倫理学会評議会では、これから行われる学術大会についても、別冊という形で継続して報告をまとめていくことを考えています。

宗教倫理学会の歩みはまだ始まったばかりですが、わたしたちが共有した学びの成果を着実に積み上げ、次の展望を開いていくための糧としたいと願っています。別冊第1号をご活用下さい。

2002年10月

編集委員長 シュペネマン・クラウス

特別講演「環境と宗教は関係あるか」(要旨)

加藤 尚 武
(鳥取環境大学学長)

はじめに

主催者にはタイトルを「環境と宗教は関係がない」としてくださいと申しあげました。きょうは学会ですから、いろいろな角度から環境と宗教の関連性について積極的なお話が出ることでしょう。しかし、ここではそういう立場ではなくて、宗教とは異なるものが環境問題では重要なのだというお話をした方が、問題を考えていく上で重要なのではないかと思います。

では、どういう点に環境問題の核心があるのでしょうか。それは、安全性ということです。皆が安全に暮らすことができるために、どういう合意形成が可能かということが重要です。人間の生命だけではなく、人間以外の生命も安全であることが重要なのです。今日、人間の生命だけを守るということはもはや考えられません。人間以外の生物の生命も共に守るのでなければ人間も守りきれないのです。とすれば、人間のために生命を守るのか、あるいは、人間以外のもののためにも生命を守るのか、といった形式的な論争に大きな比重をおくこともできません。宗教は伝統的な文化の中で重大な核心部分を形成してきました。現代においてもさまざまな精神形態が、多様な宗教と深い結びつきをもっていることは確かです。けれども、化学薬品によって汚染されているかもしれない現代の人類が直面している危機と、宗教がその核心の部分で触れ合っているかという点については、私は疑問をもたざるを得ないのです。

環境問題の本質

そこでまず、環境問題とは何かを考えてみたいと思います。いろいろな環境問題があります。オゾンホールの問題もあれば温暖化の問題などたくさんあります。環境問題と呼ばれているものは、生態系が不可逆的に劣悪化していることを指します。たとえば、森林が減り砂漠化して資源が枯渇する場合があります。以前には、枯渇型資源だけが枯渇すると考えられていましたから、循環型資源の枯渇はあまり問題にはなりませんでしたが、しかし、

おそらく今年も国連で水問題が採り上げられることになるでしょう。石油やマグネシウムが不足するといった枯渇型資源の問題ではなく、循環型資源である水そのものがないという問題の方がより深刻になるかもしれないという指摘がなされているのです。



たとえば、生物種の絶滅ということもその一つです。最近、世界中でカエルが大激減しているということが話題になりました。調査結果もそれを裏付けています。いろいろなところが乾燥地化してしまったことの結果です。私があるところに「カエルが減った」と書きましたら、「近所にカエルはいっぱい鳴いている。昔と変わらない」というお手紙をいただいたことがありました。私が住んでいる鳥取あたりでもカエルはよく鳴いていますが、世界全体からするとカエルは大激減しているのだそうです。

さらに、廃棄物の累積問題も考えなければなりません。環境問題において、廃棄物の累積は原因ですし、生態系の劣悪化はその結果ということになります。これは原因と結果をただ配列した論理に過ぎません。しかし、いろいろな環境問題を話題別に分類してみますと、この類型にならざるを得ないのです。

廃棄物の中でもっとも重要なものは、温暖化の原因になると指摘されている二酸化炭素です。炭素換算にして年間約 60 億トンという炭酸ガスが捨てられているのですから、世界の人口を 66 億人とすると、自動車を運転する人もしない人も、生まれたばかりの赤ちゃんも、すべての人が年間に一人 1 トンずつ炭酸ガスを大気圏に捨てているということになります。非常識です。これは大量廃棄物と言っていいでしょう。

環境ホルモンは最近になって問題にされ始めましたが、環境関係の学者はそれを超微量危険物質と呼ぶことがあります。日本では、一日の摂取許容量を体重 1 キログラム当たり、4 ピコグラムと決めています。逆に 1 グラムのダイオキシンが何人分の容量になるかを計算しますと、すべての人が 50 キログラムの体重だとしてのことですが、1 グラムのダイオキシンは 50 億人分の危険量に匹敵します。1 グラムが空恐ろしいほどの危険量であることがご理解いただけると思います。私の友だちが地球上の海水を厚さ 10 メートルにわたってすべて汚染しつくすのに何トンのダイオキシンが必要かという計算をしてみました。かれ

の計算によれば、それには100万トンが必要になります。日本でつくられている塩化ビニールは年間200万トンですから、その半分くらいの分量で地球全体の海水を深さ10メートルにわたって汚染することができるのです。ダイオキシンはそれほど超微量の危険物であるのです。

最近話題になっていますのは、「ダイオキシンには希釈すると毒性が増すという特性があるのではないか」ということです。それは薄めると毒性が強まるという特徴のことです。これまで薬学部における最初の授業では「あらゆる薬品は希釈することによって反応が弱くなる」と教わっていたはずですが、ですから、薬学部では何十年もの間、「誤って毒物を飲んだ時は、まず吐き出させなさい。水を飲ませて薄めなさい。希釈すればプラス・マイナスの反応は弱くなる」と教えてきたのでした。ところが、環境ホルモンという危険物は希釈することによって毒性を増すケースがあるのです。これは人間の体の中にある退治ブロックが、ある薬品が一定濃度に達するとブロック機能が働くけれども、ある濃度以下では、逆にブロック機能が解除されてしまうことによって起こる現象ではないかと推測されています。

環境問題の主要な原因を考えますと、生物資源の絶滅の場合には乱獲が多いのです。また、開発による生態系の直接的な破壊も大きな原因です。さらに、汚染物質による生態系の破壊もきわめて深刻なものであると言わねばなりません。一説によれば、地中の水の循環は1400年かかるそうです。一度汚染された大地の回復はきわめて困難なことなのです。したがって、超微量物質による汚染の場合には、それが永久に続いてしまうことだってあります。こうして継続される廃棄物の累積が環境問題であると言えるのではないのでしょうか。

東洋と西洋

3年前のことです。中国の広州で伝統的宗教と環境問題を考える会議がありました。そこには、儒教の研究者や台湾のネオ・コンフューシャニズムと呼ばれる儒教の現代的な解釈者、道教や中国の民間信仰の研究者たち、さらに農業暦や作業暦の研究者たちのほかに、仏教やイスラムの研究者など多様な人びとが集まりました。ところが、そこで参加者が皆同じ論旨を語ったので、私は唖然としてしまいました。それはどういう思想であったかと申しますと、「東洋の伝統的な思想の中には、本来『天人一体』という思想があった。その天人一体の思想によるなら環境破壊はこれほどひどくはならなかったはずだ。キリス

ト教文化と近代精神は天人一体の思想を忘れたために環境破壊を引き起こしてしまった。環境破壊を引き起こした思想的な原型は心身分離であり、二元論であり、自然を支配しようとする思想である。それが環境を破壊してしまったのだ」という思想でした。多くの研究者が同様なことを述べましたので私は驚きました。それはあまりにも露骨な政治的便乗主義と言うべきです。参加者の中からも「これはひどい」という発言もありまして、たとえば、「はたして道教の自然支配や自然の技術的支配の思想は、それがもし主流となったら環境破壊を招かなかっただろうか、むしろ、道教の魔術思想との関係についても研究しなければならぬ」という異論も提起されたりしました。

日本においては、井上哲次郎という人がドイツに渡り、当時、全盛時代にあったヘーゲル哲学を学んで帰国しました。かれは「西洋の思想は観念論である。観念論はデカルト主義を洗練させ完成させたものであって、西洋流の『心身分離』の思想に対して東洋的な『心身合一』思想を対置することではない」と述べたことがありました。これに対して井上円了という人は、「これをもって我が輸出品とせん」と考えて啓蒙家として活躍し「西洋思想は心身分離、東洋思想は心身合一」という観念形態をつくりあげたのでした。あとになって、西田学派の学者たちも大筋ではそういう考え方を下敷きにして、西洋と東洋の対比を描いていったということを日本思想として私たちは知っています。

ただし、中国周辺でイスラム教の研究をやっている人も「天人一体の思想が東洋思想の中核にあるもので、これを分離したところに西洋思想がある」という考え方を述べています。とすると、日本的な思想がどこかから輸入されてきたのか、日本でつくられた「近代の超克論」と呼ばれる観念形態が逆に東洋における現代の思想史研究家に影響を及ぼしたのかはわからないことになります。

その会議はあまりにひどかったものですから、私は「西洋にも天人一体の思想があります」という話をいたしました。たとえば、西洋にもガレノスといった人などがいます。最近では美術史家のパノスキーという人が『土星のメランコリー』という書物の中で、ガレノス主義が占星術とどういふふうに関係していたかを考察しています。西洋流の「天人一体」の思想は、おそらく古代の文化を通じて西洋と東洋の間に交流があったことから生まれたのかもしれないと考えることもできるのではないのでしょうか。熊沢蕃山のような江戸時代の思想家の中にも似たような思想形態がありました。そういう意味では、古代文化の中に原型のようなものがあり、それが西洋にも東洋も流れていったものではないかと思うのです。

私の専門はヘーゲルの「自然哲学」ですが、ヘーゲルはゲーテと同時代人です。そして、この西洋バージョンの「天人一体」の思想を近代において復活させたのはこのゲーテでした。ゲーテ、シェリングの自然哲学は西洋バージョンの「天人一体」の思想であったのですが、それが20世紀に入る頃になると激しく非科学的な思想だと非難を浴びることになりました。それはいったいどうしてでしょうか。ヘーゲルは「天人一体」の思想形態をとっていませんが、かれの有機体説は体を全体としてとらえないといけないという激しく全体主義的でホーリスティックなもの考え方でした。たとえば、病原体という外部の要素が病気の原因になるというのは、いかにも局部的で要素主義的な考え方ですから、19世紀の自然哲学者たちはそういう考え方は受け付けられないという姿勢をもっていました。ところが1892~94年にかけてパスツールとコッホが病原体説をそれぞれ違う角度から確立しました。学説史的にはコッホによる病原体のアイデンティフィケーションの原理が、病原体説を確立するようになるのですが、ロマン派の有機体説はにわかに非難を浴びるようになり、それが20世紀のさまざまな学問論争を引き起こしていったと思われるのです。

長期予測

その流れの中から環境問題も提出されてきました。これを大局的な観点から見るとどうなるかを考えてみてください。「ローマ・クラブ報告」のさわりの部分を引用しますが、1900年と2100年の人口カーブが問題です。我々はその真ん中にいます。人口カーブが21世紀の真ん中で最大のピークを描いています。ところが一人当たりの食糧は、人口の最大ピークが来る前に最大ピークを迎えてしまうこととなります。人口が最大ピークになった時、食糧は減少状態に陥ってしまうのです。一人当たりの工業生産は人口のピークと重なりありますが、時期的に40~20年を隔てて汚染が拡大していきます。工業生産の伸び方と汚染の伸び方は最初は幅が広がったのですが、だんだん縮まっていくカーブになります。これは、世界全体の統計をコンピュータで作成した最初のモデルであり、こういうモデルのほかにはたくさんのモデルがつけられています。このように長期的な予測にある程度の目処が立ってきたのです。

世界の人口増加率の長期的な推移はどうでしょうか。1975年には2.0パーセントでした。世界の総人口の毎年の伸び方は1975年がピークで、あとの伸び方は減っていきます。B.C. 800年後のイエスやお釈迦さまなど、ヤスパースが「枢軸時代」と呼んだ時の人びとは、まだ人類全体が変動時代を迎える前の時代に属していました。私たちの次の時代は、人口

が多く、定常化している時代ということになります。そして、我々は変動時代から変動時代の終わりに向かって生きつつあることになります。私が研究しているヘーゲルは、世界全体が変化するという形でとらえないといけない、と定常時代の文化から変化の時代へとという視点の転換を図ろうとしました。そういう主張をしたのがヘーゲルであり、マルクスでした。しかしその次の時代は、再び新しい意味での定常化の時代が来るとということが人口予測から出てくる長期的な視点なのです。

そこで、今の人口から見て、世界全体の文化史はどのように考えることができるかというモデルをつくってみました。すると人類の文化の最初の時期は、少人口と定常時代ということになります。そして、先史時代から中世まで単純再生産の生産形態の時代です。つまり、信仰の中心となるものは同一なるものへの信仰であり、法律上では自然法主義が中心の概念となり、生産形態は狩猟から農耕へとといった特徴をもった時代でした。その次に現代がやってきます。私たちが生きている時代です。近代から 21 世紀までを含みます。それは拡大再生産を生産形態とする時代であると言えます。

20 世紀と 21 世紀を特徴づける事例を申します。1909 年にフォードが T 型フォードという自動車をつくりました。これは大量生産もしくは見込生産の始まりでした。その時、フォードの株主たちは「大衆に向けての大量生産型の自動車はつくるな。儲からないからやめろ」と主張し、フォードと出資者は経営方針で争いました。自動車は大金持ちから注文を受けて、「革張り、紋章入り」などと注文通りにつくってこそ儲かるので、「大衆のための自動車などつくっても儲かるはずがない」というのが出資者の主張でした。ところが 1909 年、T 型フォードによって大量生産へと変わりました。大量生産、見込生産の時代が始まったのです。

ところが、今年鳥取でサンヨーが大量生産から一品生産へと工場システムを転換しました。同じように、いすゞでもソニーでも大手企業は大量生産から一品生産へと生産工程の転換を図ろうとしています。とすると、T 型フォードが始まった 1909 年から 2001 年までの間が大量の見込生産の時代で、2001 年から一品生産への復帰ということが新しい生産形態として始まったのではないかと思います。

大量生産の時代には、常に生産規模が拡大する、いわゆる拡大再生産が文化の基調になっていました。進歩への信奉ということもありました。あらゆるものが未来には大きくなり、豊かになるだろうという信念が背後にあったと思います。法律上では国民主権主義と法実証主義とが法律というものの考え方を支えていました。同時にそれは、機械工業と化

学工業の時代でもあったと言えるでしょう。

しかし、ゼロサム社会と呼ばれるこれからの新しい時代を考えてみますと、地球規模で人口は大きくなっていきます。数日前の新聞には、世界の最大ピークの人口は97億人になる、という国連統計が載っていました。そしてすでに、人類の中で8億人は栄養不足だと言われています。現在の人口60億人が90億人を越えるようになれば、その分の食糧をどうするかという問題を考えなければなりません。深刻だと思います。

進歩への信奉は、時の経過とともに豊かになるという間違った考え方に基づいていました。今「持続可能性のための合理的な制御」を問題にするのであれば、産業形態の評価軸は「進歩」ではなく「持続可能性」にと移行しつつあることになります。今年「家庭電化製品リサイクル法」という法律ができ、来年「建築リサイクル法」が、そして再来年には「食料品リサイクル法」ができることになっています。日本をリサイクル社会にと移行させようとしているのですが、それは日本が「持続可能性」という尺度によって産業を評価するような社会にと変わりつつあるということなのです。

そして、社会は「国民主権から国際法へ」という方向の変化も兆し始めました。国民主権は民主的に決めれば何をやってもいいという考え方に基づいています。民主的に決めればアフガニスタンで空爆をするのも構わないという考え方です。しかし、それは「国際」というものに主力をおいた考え方に移行せざるを得ないのではないかと思います。いろいろとショッキングな事例は多いのですが、情報と生命の技術が、機械工業、化学工業に代わって新しい技術の中心なりつつあります。

私はおよそこんなふうに予測しています。もちろん、私一人の予測ではありません。多くの予測を集めて整理すると、こんなふうになるのではないかと考えているのです。

自然の歴史性

かつて、自然というものは人間がどんなことをやっても元通りになるという考え方がありました。我々がどんなに自然を破壊しても、それは自然全体から見ればたかが知れたものであり、自然全体は循環的であるという考え方です。「年々歳々花相似たり」というのは8世紀の中国の詩人の詩です。そこには、「歳々年々人同じからず」という対句がありました。同様に西洋人も、自然は全体として循環し元に戻っていく循環系なのだ、人間のつくった精神の歴史だけが非循環系である、というように考えていたのではないのでしょうか。私はヘーゲルの自然哲学の翻訳者です。もし、「ヘーゲルの自然哲学は、自然は全体として

歴史的だというふうに見ていたのか、自然は全体として循環的だと思っていたのか」と訊かれるならば、ヘーゲルもまた自然は循環的だと考えていたと答えます。ヘーゲルの中に進化論の先駆形態を読み込んで、「自然が発展する」、「自然が転換する」という思想を指摘する人もいますが、現在のところ、ヘーゲル研究者たちは「それはない」という結論を出しています。19世紀のヘーゲル主義の思想の中で「歴史」という概念が大きく登場し、恒常の時代から変化の時代へ転換したと言われますが、まだ「自然は循環し、人類は発展する」という二刀流であったと言えるでしょう。

この考え方は、人類の歴史においては相当に長いものです。およそ文化というものが始まって以来、そういう考え方がベースになっていました。その点では東洋も西洋も同じだったのではないかと思います。今、物理学者に尋ねれば、「自然は循環しない。それは本質的に非循環的で歴史的なプロセスである」という答えが返ってくるでしょう。たとえば、恐竜時代の終わりについての一つの学説は、隕石の落下であったとされています。かつての生物学者ならば、「そんな偶発的で外部的な事情によって一つの生命の歴史が変わってしまうというバカなことかあるだろうか」と考えたと思いますが、今の人たちは「そういうふうにして、生物の歴史全体が変わってしまうことがある」と考えているのです。隕石による恐竜時代の終焉も十分にあり得ることとして認められています。

20世紀の人類は石油や石炭を燃やし続け、炭素換算で一人当たり1トンの炭酸ガスを毎年大気圏に放出し続けました。地球の温度が何度か上がって地球の生態系が破滅するかもしれません。「あり得る」と考えるのが現代の自然観なのです。20世紀の中頃は「自然は本質的に歴史的であって、ビッグバンで地球をつくって始まった開放系の歴史性をもったものである」と考えておりました。それに対して、21世紀の後半の人類は、「温暖化というのは、間違った廃棄物処理をすることによって、地球全体の熱平衡を歴史的に変更してしまうという過ちをおかし続けた結果である。自然はあと戻りする能力をもっていない。すでに自然の自己回復力を越えた廃棄物量を越えてしまった」と言わざるを得ないだろうと思います。もちろん、核兵器や核エネルギーの開発ということでも自然の平衡系を破壊することはできます。臓器移植を行うことによって細胞の安定した自己同一性を破壊することもできるでしょう。あるいは、遺伝子操作によって自然の同一性機構を操作することもできるのです。今、17世紀の人びとなら絶対に考えることができなかった自然に対する人工的な操作が起こっているのです。

フランシス・ベーコンは技術の思想をつくった人でした。その中心的な考え方は「自然

は服従することによって征服される」ということでした。それは、自然というものもっている大きな法則に人間は服従しなければ自然を支配することはできない。服従することによって初めて自然を支配することができる、という考え方です。逆に言えば、どんなに自然を支配したって、それは自然法則に対する服従なのだというふうにベーコンは考えていたと思うのですが、現代的な意味ではそういうことは成り立ちません。ひょっとすると人間は自然そのものを破壊する可能性がある、というのが現代における自然観の基本になるのではないかと思います。自然そのものが循環性をもってはいないからです。現代物理学から現代科学全体にかかわるそうした新しい自然観、つまり、自然そのものが歴史性をもっているという自然の歴史性に基づくならば、「人間が地球をいくら破壊しても地球は回復する力をもっているなどということはいえない」ということを、今、我々は十分意識しておかなければなりません。

資源の分配

21世紀の私たち人類がどんな問題に直面するかということをお食糧問題、水問題を通じて考えてみたいと思います。世界の一人当たり穀物生産量を例にしましょう。ローマ・クラブによる報告では、人口の最大ピークを迎える前に食糧生産の最大ピークが来ると言いました。これはレスター・ブラウンのワールド・ウォッチ研究所が発表しているデータによるものです。1984年が一人大当たりの穀物生産高の最大ピークですが、あとは毎年一人大当たりの穀物生産高は下がり続けていきます。このデータを聞いた時、ある人は「そんなバカなことはない。穀物の一人当たりの生産が減るなら相場師が黙っているはずがない。穀物価格というのは株よりもっと確実な相場の対象であって、穀物の値上がりが確実であるならアメリカの農家は穀物の作付面積を増やすことによって利潤を得ることが可能なのだから、資本主義化した農業において、穀物の生産高が一方向的に低下するというバカなデータはありえない」と言いました。それは市場という観点からの反論です。それ以後、その反論は間違っていることがわかって、穀物生産は減少の一途を辿っています。なぜならば、アメリカのニューディール政策によってつくられた穀倉地は地下水の汲み上げによって維持されていますから、地下水の汲み上げができなくなれば穀物生産もできなくなります。水資源の限界が穀物生産の限界でもあるのです。

最近では牛肉問題が話題になっていますが、肉食が増えると食糧不足が起こります。鶏卵1キログラムをつくるのにトウモロコシは3キログラム、鶏肉で4キログラム、豚肉で7

キログラム、牛肉で 11 キログラムが必要なのです。ですから、牛肉を食べる人が減ると、世界の食糧事情はよくなると考えられるのです。1970 年代において世界の総人口は 37 億人でした。玉城康四郎先生という大先輩は「加藤さん、世界には 37 億人の人口がいるのです。もう世界は破滅ですわ」という話をよくなさいました。講談社学術文庫の中にある本にその話が出ています。その当時、9 億人が飢えていました。現在は 60 億人のうち 8 億人が飢えています。割合から考えれば、はるかによくなりましたが、しかし、これからもずっとよくなるという見込みはないのではないのでしょうか。

日本の食糧供給率についても考えてみましょう。1970 年代には、一人が 2400~2300 カロリーを摂っていたのに対して、最近では健康番組などでの「食べすぎるといけない。肥満は健康の最大の敵」という宣伝の効果がありまして、一人の摂取量は 2000 カロリーくらいに落ちついてきています。日本人の健康維持が情報によって改善されたという事例であろうかと思えます。ところが、それにもかかわらず一人当たりの食料供給量は増え続けているのです。食べる量は減り続けていますが、つくる量は増え続けていることになります。つまり、捨てる量が増えているのです。食糧のロス率が 22 パーセントあります。ある本では 38 パーセントだと書いてあります。これは、一年間に 4,000 万人が生きていくことが可能な食糧にも等しい量です。そしてそれだけの食糧が捨てられていることになります。アフガニスタンに送ることができればと思うくらいにすごい量です。アフガニスタンの人が肥満で困るほどのたくさんの分量が日本一国で捨てられていることになります。

次に水不足についてですが、穀物を 1 トンつくるのに 1,000 トンの水が必要になります。一人当たり 300 キログラムの穀物を保障するためには、黄河の水が 2 年ごとに 1 トンずつ増えていくくらいの水量がないと穀物生産が維持できません。しかし、黄河は海に行く前に枯れているという時代です。こういう状況になるとダムを造ってもしょうがないということになります。昔は、ダムを造って海に流して捨ててしまう水を海に流さないで大切に使いましょうと考えました。しかし、今は、どっちみち海まで水が届かないのです。ダムで堰き止めたって、上流の人だけが使って下流の人は使えないという結果になっています。ダムで堰き止めても何の役にも立たないという水不足時代になってきているのです。中国では水 1,000 トンに対して穀物 1 トンが基本的な比率ですが、中国では水を穀物に使った場合、200 ドルくらいの利益があります。工業生産に使うとその 140 倍の利益が上がることになります。ですから、水資源全体の産業領域の間での奪い合いの状況を考えますと、おそらく人類は経済性を中心に水の配分をすれば、工業部門が水を独占してしまい、

農業部門の水は不足することになるでしょう。食糧不足の背景にあるのは水不足ですが、水が余っているが使い方が下手で不足する時代はもう終わってしまいました。目一杯使っても不足してしまう、という絶対的な水不足に近い状態になってきているということが言えるのです。

こういう問題を考えてみたいと思います。それは、今、私たちの国では食糧の 20 パーセントを捨てているということです。「どうやって捨てるのか」との質問には、「あなたは回転寿司が好きですか」「大好きです」というような問答でお答えしましょう。回転寿司は何分間か回転したらそのあとは捨てるという方式です。回転寿司では一日中、イカの握り寿司を回していたら客がつかいません。売り残りはどんどん捨てます。そして、テイクアウトの食品が増えれば増えるほど廃棄率は増えることとなります。10 人がパーティをするのに寿司、サンドウィッチ、ピザ、ソバが必要であると仮定しましょう。下手な幹事ならば、40 人分の食べ物を用意するでしょう。完全に選択が自由で、充足率を 100 パーセントにするには 40 人分の食糧を用意しなければなりません。しかし、実際にはそんなバカなことをする幹事役はいません。「誰々さんはピザを食べない。誰さんは寿司に先に手を出す」などと人びとの好みを勘定に入れて計画します。10 人いれば 12 人分くらいの食べ物を用意しておけば、すべての人が自由に選択し十分に充足し、自由も平等も十分満たされる条件になるのではないかと思います。つまり、日本という国は 22 パーセント、場合によっては 38 パーセントを捨てているわけですから、日本は自由と平等を満たすために、12 人分を用意していると言えるのです。

では食糧が 10 人に対して 10 人分しかないとしたらどうでしょうか。10 人分しかない時は、餓死者を出さないために自由な選択を制限して平等の生存可能性を優先することになるでしょう。「俺はピザが好きだ」と言っても「あんたはだめだ。あんたの体重を考えてサンドウィッチにしてください」と自由な選択制度はやめることとなります。さらに 10 人に対して食糧が 8 人分しかない時、餓死者を出さないためには自由な選択を犠牲にして、均等に配分し、平等な生存可能性を優先的に保障することになるでしょう。そこではまだ自由と平等の両方が維持できていると思います。しかし、10 人に対して食糧が 5 人分しかない時はどうなるでしょうか。餓死者を最小限にするためには、自由な選択と平等な生存可能性を犠牲にしなければなりません。もっとも強い人にだけに食糧を配分することになります。5 人になった時、5 人に均等に分けたら全滅してしまうからです。

人類規模の倫理

倫理学には「lifeboat ethics」という言葉があります。この言葉を読んだ時、これもまた倫理的な判断の枠組みの一つだと思うと、そのあまりにも露骨で非倫理的な考え方にびっくりしたことがあります。それは、共有地の悲劇という「tragedy of commons」と並んで使われている言葉です。特に昨今のように、先進国はアジアやアフリカの低開発国に対して「もしも今のレベルで援助を続けたなら先進国それ自身が沈没してしまう。先進国の低開発国への援助はいい加減なところでやめて、低開発国を見殺しにした方がいい。そろそろその見極め時だ」という意見が出されている時、「あれはlifeboat ethicsだ」という言い方がなされるのです。それ以外にも、救急車の倫理と言いますが、「triage」と言っていわゆる「野戦病院の倫理」があります。野戦病院ではけが人を3つのグループに分けるのです。「こちらの人たちは手当てをすれば助かる」、「この人たちは手当てをしなくても助かる」、「この人たちは手当てをしても助からない」というように。日本では5種類のカードを用意しているようですが、ナポレオンの軍隊がエジプトに遠征した時は、露骨に3種類でした。こちらの人びとは手当てをしても助からないから見殺しにするので運んでもいけません。そのままにします。手当てをすれば助かる人には手当てをします。手当てをしなくても助かる人は薬を渡してはいけません。そういう倫理によって、生存のための最大効率を追求します。野戦病院の倫理は「それをやらなければ敵軍によって部隊が全滅するであろう。だからやらざるを得ない」というものです。しかし今、人類はもしかすると、この段階に到達しつつあるのではないのでしょうか。

たとえばのことですが、東南アジアは手当てをすれば助かると考えてみましょう。インドネシア、韓国、マレーシア、インドの一部部分は手当てをすれば助かるのです。ところが、アフガニスタンからアフリカにかけては手当てをしても助からない人たちということになります。手当てをしなくても助かる人たちは、日本とかアメリカ、フランス、ドイツであって、ロシアのプーチンはなんとか手当てをしてもらいたいグループに入りたいのです。

21世紀における地球全体の問題点は何でしょうか。21世紀の後半部分では食糧問題で一番の危機が発生する可能性が高いのではないのでしょうか。「その時、本当に世界全体の人びとが協調し合い助け合って生きていく道を選ぶか、誰かを見殺しにするのか」ということが、これから100年くらい間に人類全体が直面する一番大きな選択肢ではないかと思います。私は、そうならないように環境問題においても、世界全体が協調することで、多少

無理をしてもがんばっていかうではないかという考え方を採用していった方がいいのではないかと思っています。しかし世界全体というのはかなり危険な兆候を見せておりまして「どうせそんなことやってもうまくいくはずがない。京都議定書をつくってチマチマと炭酸ガスの削減をやってもうまくいくはずがない。国際協調主義をとるくらいなら、そんなものは蹴っ飛ばして、自分の国だけでもうまく利権を確保した方がいい」と誰かが言いたしたとたん、それについていくしか仕方がなくなってしまうのです。アフガニスタンに爆弾を投下したあとで「天然ガスのパイプの利権を取るんだ」という人がいたら「俺もそれに乗せてくれ」と言うよりほかに仕方がないんじゃないかという可能性がチラチラと見え隠れしているのだと思います。

おわりに - 宗教と倫理 -

たしかに、宗教と環境問題はいろんな点で結びつきがあるのでしょう。けれども、今、私たちに緊急に必要なのは環境問題が実際に人間の生命を脅かしているのだ、という認識です。環境問題は人間以外の生物の生命も脅かしているのです。今までは人間以外の生物はどうしてもよくて「人間の生命を守るためにカエルを守ろう」と言うのか、あるいは「カエルの生命だって大事なんだぞ。人間の生命を守るためにカエルを守るのは人間のエゴイズムだ」といった具合に、「人間のために守るのか、カエルのために守るのか」というような論争を環境学者は繰り返してきました。しかし私は「もうやめよう、バカげている」と思っています。

「国連生物保護憲章」では「すべての生物の種を絶滅させないように守ることが人類の義務である」としています。その理由は、人間を守るためであろうと、カエルを守るためであろうと理由はどうでもいいのです。今、人類が直面しているのは、「生命の危険をいかにして避けるかという高度の合理性と、高度の国際協調性を保っていかないといけない」という状況なのです。19世紀末から20世紀は「人類全体が協調し合って微妙な運転なんてできる能力はない。いざとなったら戦争に訴えてもいい」というのが世界規模での共通の考え方のようなものでした。しかし今は「人類は戦争をやる余力がない。人間の生命を守るための戦争が悪いのではなく、戦争という形で環境を破壊した場合、それをもう一度回復するコストが高すぎるから、もう戦争はできない」というのが環境関係者の考え方であると思います。

「人類全体の将来像に対する合理的な予測に基づく国際協調」が、今、私たちに一番要

求されていることなのです。それに対して宗教は直接にどういう影響をもつかということ
を言うとしたら、「我々は宗教がなくても協調でき、問題の解決ができるのであって、宗教
ぬきに解決できないということではない」ということになると思います。以前、ハンス・
キュンクさんが来た時、ひどいことを私は言いました。キュンクさんは「世界の宗教の間
で平和が確立されないうちは世界の平和は来ない」と言いました。しかし、私は「そんな
ことを言ったら世界に永久に平和は来ない。宗教者の間の平和を先に確立するなんてバカ
げている。命あっての物種なんだ。命が大事なんだ。皆が現実的な利益に目覚めて平和と
環境保護をやることの方が先だ。宗教はあとから来るものだ」という話をして、キュンク
さんもびっくりされたことがありました。

「よくお釈迦様でもご存じあるまい」などと言いますが、20世紀から21世紀への人類
の危機というのは、お釈迦様は全然知らなかったことですし、お釈迦様とは関係がないこ
とだと思います。人間の精神について、ある一つの根源的な洞察の時代、人類史の中のあ
る時期をヤスパース流に言えば「枢軸時代」という言い方になりますが、古代の原始社会
の文化がやっと成立し、そこに人間の精神の自由が見られた頃に考えた人間精神の尊厳性
は、定常時代の始まりの頃の文化におけるものと、さらに、20世紀から21世紀にかけて
人類の端境期というきわめて特殊な時期に起こっている人類の危機下でのものを直接的に
結びつけることはできないのではないかというのが、私の報告です。皆様のご批判を仰
ぎたいと思います。報告はこれで終わらせていただきます。

質疑応答

司会 どうもありがとうございました。いただいたお話は広範なものがありますが、宗教と環境問題について、現在の置かれているところでは直接、宗教とかかわらせるものではないのではないかというご提言をいただきました。

皆さんの方からご質問、ご意見がございましたらお願いいたします。

佐藤 カエルとかサンショウオを専門に研究している佐藤と言います。先程、カエルが減っているというお話がありました。昨年7月「カエルが減っている」という本を書いたカリフォルニア大学のバークレー校のウェイクと中国で会いました。彼は僕に「私の名前が出ているということだが、知っているか?」「朝日新聞の本の中に入っているよ」「カエルが減っているという話を書いたけれども、すべてのカエルに言えるということではない。言葉か先に進んでいる。私としては心外だ」と国際会議で言っていました。確かに一部ではカエルは減っています。しかし激減している意味合いではないということです。種によって減り方が違います。昨日と今日、新潟大学で爬虫類・両棲学会でサンショウオの発表をしてきましたが、カエルの減少の話も発表していました。しかし日本においてはカエルだけが急激に減っているということはない。いろんな生き物が全体を通して減っていることはあるけれども、カエルだけを採り上げられるのは私としても心外なので、この点をつけ加えておきたいと思います。

2点目は、分類の中で4つ分けられた。生態系の劣悪化、資源の枯渇、生物種の絶滅、廃棄物の累積。生物種の絶滅と生態系の劣悪化は一緒にあっても構わないのではないかという質問です。

3点目は、共有地の悲劇、救命艇の悲劇の話で、穀物の20%ロスの問題と、水を農業に使うより、工業に使う方がお金という枠組みの方では高価だからそちらを使った方が現実的にはいいのではないかという中国の話がありました。まさにコモンズの悲劇の共有地をどう考えていったらいいのかというのは一番大きな問題だと思います。加藤先生が10年前に出された『環境倫理学のすすめ』の中の2番目の「世代間倫理」を、私たちが次なる世代にどう残していくべきかということで、共有地の問題が大きな問題になると客観的に言われましたが、先生ご自身の考え方として世代間倫理の視点からどう乗り越えていったらいいのかという質問です。

加藤 私もカエルが日本で激減していることはあるのかなという実感はあるんですね。問

題はカエルが激減したかということは素人の実感ではわからないということです。生態学とか動物行動学をやっている人が集まると「君、何やっていますか?」「僕、カエルです」「僕、トンボです」という言い方をします。トンボ屋さんのトンボの種類の数と我々素人は全然違うんですね。トンボ屋さんは30種類、40種類のトンボをさっさと見分けられます。テントウムシ屋さんは卵を網を張って、どのくらいまで進んだかという調査をしたり、我々素人の自然観察ではわからないようなことがある。テントウムシやトンボやカエルだけではなく、あらゆる生命の安全度について「安全性の情報依存時代」と呼んでいるんですが、今、あらゆる安全性の問題が経験的に自明ではなくなっている。経験的な自明な安全性に依拠して判断することができない。「うちの近くにカエルいるから大丈夫よ」というおばあちゃんから手紙をもらったので、ちゃんと調べて「大丈夫ですよ」と手紙を書きたいけど「大丈夫ですよ」と書いていいかわからない。特にダイオキシンのように超微量物質であるとか、放射性化学物質とか食物連鎖を通じての生体内増殖によるところの危険度とか、学問的には定説ができていない環境ホルモンとか、狂牛病の原因になるプリオンとかになるとわからない。19世紀の人々は「すべての危険は自明だ」と思っていたと思うんです。経験的に「危ないのは避けなさい」と自分で避けることができる、嫌なものは買ったりしないからモノを買ったり、売ったりする時、自己決定を認めてやれば、世の中全体としてうまくいくというオプティミズムを19世紀の人は確立した。

20世紀、公衆医学が病原体以後、成立するわけですが、20世紀の人は自由主義のもとになっている危険の経験的自明性の間違っただけで、すでに成り立たなくなったにもかかわらず、相変わらず「自由主義だけは守ろう」という判断をしたので、我々は危険についての最も正しい情報を常に提供してもらわないと判断ができないということになったと思うんです。間に合わないことがある。いい加減なところで見切り発車しないといけないことがある。炭酸ガスもいい加減なところで見切り発車して、温暖化をやめさせる方向に行くよりしようがないというのが大方の人の判断だと思います。

原子力発電所の核廃棄物の実用的な安全管理機関は1000年です。東大の工学部の建築工学の先生が「私が設計すれば1000年間は保障します」「先生、安全性を50回くらいやってみてからやってみたらどうですか」と言いました。建築の安全基準は1、2回で、もう大丈夫だということはないんです。少なくとも50回、5万回もやって安全基準ができています。神戸の地震があった時も安全基準の見直しをするわけですから。「安全基準を50回くらいはやってみましょうよね」と言うけど、50回やることはできない。

地球全体という大きな規模で、数百年間という巨大な時間の幅を持った因果関係について、普通の意味での反復可能性を前提にした因果性は成り立たない時代になってきていると思うんです。絶滅と廃棄物の累積はほとんど同じになっていることは確かですが、植物の絶滅については乱獲がかなり大きな影響力を持っています。植物種の絶滅のうち乱獲部分が少なくとも5%あると言われていて、植物の乱獲を防止する法律をつくって急に絶滅が減ったということがあります、鯨の問題とか。漁業全体の収穫量が減っているという問題があります。環境型の絶滅原因の他に乱獲型の絶滅原因を決して無視することはできないのではないかと思います。

tragedy of commons、「自由主義経済のままで本当に人類は長期的な環境対応ができるのかどうか」ということですが、レスター・サローという経済学者は「資本主義社会の予測能力は平均して8年」という面白い数字を出している。ところかローマ・クラブ報告は200年規模で予測しないと危ないと考えています。今日、環境問題の政府間パネルとか資源工学の人たちは500年くらいまで時間を見て予測数値を出している。たとえば鉛資源は枯渇するとか。最近ではディスマスが希少資源になってきている。コンピュータをつくる時のハンダの中に鉛を入れて低い温度で溶けるようにしているわけですが、鉛が公害を引き起こすので、鉛よりもっと微量の物質で融点を下げる物質が必要になってくる。それをアメリカの軍事政権が密猟のようにして採取し、密輸して国際問題と結びついていることがあります。そういう問題についても長期的なレベルで予測を立てていることが必要になってくるわけです。

「持続可能性」という概念がどこまで合理的な予測のもとで成り立ちうるか。あらゆる資源について鉛とかアンチモンとかディスマスとか全部について絶滅の年表が検索可能なので、その中で持続可能性をどうすれば維持することができるか。工業社会全体の長期的な設計思想をつくらなければいけない。工業社会そのものの sustainability を考える。私は塩ビ協会から「塩ビの sustainability についての報告書をつくってくれ」と頼まれています。「塩化ビニールをやめろ」というのは簡単なんです。塩化ビニールはそれ自体、廃棄物を処理するために塩化ビニールをつくって産業化している。塩化ビニールそのものが廃棄物の処理の形ですが、それをやめた場合、どんな別の廃棄物処理の方法があるか。塩化ビニールをやめると東南アジアの技術開発ができなくなるくらい塩化ビニールは安い工業製品の原料になっている。塩化ビニールの安全管理、安全処理ができるか。塩化ビニールという商品の sustainability を評価していかなければならない。厳密な意味での完全循環系は

ありえないわけですから、あるところで収斂させていくことで sustainability を出していかなければならない。そういうふうに工業社会全体が sustainability というものを基準にしたアセスメント、評価基準で動く形に持っていけないと工業社会そのものが維持できない。工業社会にも「納得しなさい、わがまま言うな」という方向に向かいつつあると私は思っています。そういう社会をどういう形で建設できるか。かなり現実的な問題だと思います。東大の工学部の先生が「ゼロエミッションの村あって、23 種類の業界が相互にコ・循環してゼロエミッションにするというプランがある」「しかし一つコケたら皆コケる。どこかの企業が倒産したら全部廃棄物のコ・循環系ができなくなるけど、どうするんですか？ 一つの企業が倒産したら全部コケるというプランではないか」とアセスメントに異議を唱えたのです。山梨県のゼロエミッション団地の話です。

持続可能性という尺度で工業社会を評価していくと、次から次へと難問が出てくる。「どれが最終的に解決不可能なのか、解決可能なのか」と考えると、今のところ世界全体の技術で「絶対解決不可能という答えはまだ出ていない」と思うんです。「長期的な計画の中で技術的に解決可能という道を十分考慮に入れた未来戦略がありうるのではないかと私は思っています。

花岡 大阪府立大学です。ヘーゲルの自然哲学から絶対理念へという、キリスト教の神の自発展開ということで最終的に絶対理念まで来て哲学で解決ということになると思いますが、ヘーゲルの場合、宗教は哲学の一つ手前にあり、諸問題は哲学で解決できるようになっています。加藤先生は人間性、自由とか平等、博愛ということで最終的にこの問題は解決できる方向へ持っていけるとお考えでしょうか。宗教的に「命」まで見ないと将来世代のためには問題の解決ができないのではないかと思います。宗教以外で自分の立場を絶対化していくと解決の道がないのではないかと、すべての宗教、哲学がいるのではないかと思います。

加藤 食糧の供給が 50% になった時、すべての人に配分すると全滅してしまう。生態系をやっている人は狼は食べ物を食べる順番が自然に決まっているのだそうです。「お前、死ぬ、俺生きる」という順番が自動的に決まるのだそうです。鹿は順番が決まらないから大量に絶滅するそうです。平等主義的に絶滅していく文化を持った動物と、食糧供給が 50% になったら個体数を 50% 減らすという戦略を持っている生物と両方いるようです。人類はどっちの生物に属するかという問題に、21 世紀の人類は直面するであろうと私は思うんです。

その時、すべての宗教者が「狼の論理はごめんだ」と言ってくれるかどうかについて私は自信がないんです。ある種の宗教という形をとった観念形態は「狼の論理がいい」と言うのではないかという心配が私にはある。宗教の中には「狼派」の人たちもいるかもしれない。「鹿派」の人たちもいるかもしれない。そこまで人類が行った場合、より生き残りの戦略であるかどうかについて、宗教とは違う尺度で、すべての人が「このへんで踏みとどまらないと危ないよ」という共有理解が、宗教抜きでも可能であるとすれば、その可能性は追求する必要がある。「宗教がないと、どうしても解決つかない」とおっしゃるならば反対はしません。反対はしないけれども、「宗教がなくても合意形成は可能だ」と言わないと困るような気もしているんですね。

金子 天理大学です。花岡先生の人間性の評価に関連して、lifeboat ethics とか野戦病院の倫理、どちらも倫理という言葉はついていますが、加藤先生は倫理とは考えておられないのではないかと聞いていました。端的な表現は「エルネアデイスの板」だと思いますが、それは強い奴が生き残るとい自然淘汰の論理ではないか。合意形成を考えていく場合、単なる合理的な選択というものと、倫理的な選択がある。先生の思考実験は概念整理が整っていて、私もついトリックに引っかかりそうになるのですが。

加藤 トリックとはひどい(笑い)

金子 私は合理的な選択と倫理的な選択は違うのではないかと考えています。倫理的な選択の中には合理的な要素以外に、人間における不条理とか非合理性とかがあって、それをカバーするのが宗教性ではないかと思えます。そういう意味で宗教の出番は全くないというわけではないと思っています。lifeboat ethics とか野戦病院の倫理は倫理と判断されているのかどうか。

加藤 言葉づかいとして。日本語では倫理的によいものを倫理ということがありますけど、モラルにしても、moral consumption という時、必ずしも「道徳的によい」という意味ではない。「社会的に」というのとほとんど同じ意味で「モラル」という言葉が扱われていることがあると思います。ethics も悪人の ethics とかヤクザの ethics があっても言葉づかいに異議を唱える必要はない。問題はこうです。すべての人が自分の判断で自分のいいと思うことをやっていれば全体としていい判断になるという個人の自己決定の集約が「wealth of nations」になったり「private value is public value」という連環になっているかどうかという

問題です。19世紀の60年代にジョン・スチュアート・ミルが『On Liberty』を書いた時、向こうから馬車が来れば危ないと思って避ける。それをわざわざ「お前は避けなければだめだよ」と言って縄を張って避けさせる必要はない。そういうパターンリズムは不要だというのが自由主義の原型だった。ところが今、私たちはあらゆる危険というものについて科学的な情報が正しく伝わらなければ、とても自己決定能力を発揮する場がない。19世紀に考えた自由主義のままですらうまく行くはずがない。ところが私たちは相変わらず19世紀型自由主義に依存していて「地球全体が lifeboat ethics のような危ないことに陥ることはないだろう。そんなひどいことを考えるバカはいない」と思っている。そうじゃないのではないか。気がついてみたらそういうことになっている危険があるのではないか。もっと我々は地球全体の運命について共通の理解を持つ必要がある。

その時に宗教の出番があるかないかという問題より、今、必要なことは長期的な未来予測の観点から sustainability を合理的につくっていかうではないか。「未来人」にならないといけない。我々は「地球人」にならないといけない。地球の端っこで起こっていることはどうでもいいということではない。もっと未来人になり、地球人になる。そうすればもっと「自然人」になる。自然を愛する自然人になる道も出てくるだろうと思うんです。人類がある意味で道徳的な判断というより、タカを括って「いくら何でもそんなにひどいことにはならないだろう」という思い込みはかなり危険だというのが、21世紀の倫理状況ではないかと思うんです。そういうものに対する警告として「lifeboat ethics」とか「救急病院の倫理」というパターンを類似したので、トリックだと思わず、警告だと思ってください(笑い)。

司会 加藤先生から今の問題を提示していただきました。宗教倫理学会はそういう目標を持っていますが、それぞれの宗教の立場に今まで固執しがちで、それぞれの土俵を持って対話と言っても本当の対話になっていないことが多かったわけです。今の先生のサジェッションを聞いていますと、我々はもっと広い、地球全体を見通す立場でものを見ていかなければならないということを教えられたような気がします。今日は貴重なお話を聞かせていただきまして、どうもありがとうございました。

公開討論会「エコロジーと宗教」

司会（徳永道雄） 発題をしていただく澤井先生は宗教倫理学会の研究プロジェクト委員会委員長です。もうお一人、学会の事務局長である小原先生に発題していただきます。その後、皆さん方と一緒にこの問題を考えていきたいと思います。先程の加藤先生のお話で打ちのめされそうになり、バケツで頭から水をぶっかけられたような気になったのですが、一種のトリックにかかったのかもしれませんが。あのような問題はすでに研究プロジェクト委員会でも出ていて、現実のあまりの深刻さに我々はまるでピラミッドを這いのぼっていく蟻のような感じがしていたのですが、それにめげずに、この問題について宗教の立場から何か主張することができるだろうという希望を持ってやってきたわけです。そういう意図で今から討論会を始めたいと思います。まず天理大学の澤井先生から発題をしていただきます。

宗教的自然観 東洋と西洋

澤 井 義 次

（天理大学）

6月以降、毎月、研究会を開催してまいりました。まず、研究プロジェクトにおける主要な研究成果とともに、今後の研究課題について述べることによって、この公開討論会における論点を提示したいと思います。

東洋と西洋において、宗教的な自然観はかなり多様です。宗教的コスモロジー（人間観・世界観）がどのように違うのかと言いますと、自然と人間のつながり、あるいは、「自然」という概念に込められた意味が少しずつ違ってきます。西洋における宗教的自然観は「自然を支配する」という考え方が顕著ですが、東洋における宗教的自然観では、「自然に対する親密さ」を強調する傾向があります。たとえば、中国の老荘思想には、「無為自然」という考え方があります。また仏教には、「草木成仏」という思想があります。伝統的な神道では、アニミズム的な世界観もあります。

「自然」という言葉は、元々、中国語の「自然」(ツーラン)ですが、その言葉を日本文化が取り込んだわけです。現代の中国語では、「自然」は nature を意味していますが、それは日本語の「自然」が中国に逆輸入されたものです。元来、日本文化には、人間存在と切り離して自然を対象化してとらえる考え方はありませ



んでした。それが明治以後、西洋の文化や科学技術が入ってくるようになって、自然を人間存在と切り離して考える考え方が顕著になってきたのです。この点については、徳永道雄先生(京都女子大学)が、第1回研究会「自然(しぜん)と自然(じねん)」において明らかにされました。

今日、西洋文化に根ざす自然科学的あるいは機械論的な自然観は、現代の日本文化でもかなり主流をなすものの見方です。しかし、それと同時に、依然として日本文化には伝統的な自然観、東洋的な自然観とでも言えるものが併存しています。つまり、自然科学的あるいは機械論的な世界観と日本文化の伝統的な自然観が、現代の日本文化のなかにはあるのです。日本文化特有の伝統的な自然観に関する具体的な内容については、第3回研究会「『天地の間』という自然観 遺体から遺伝子まで」において、三宅善信先生が提示されました。多神教である神道では、古代から神々が山や川、田などに宿ると信じられ、自然は神と同一視されてきました。

西洋における宗教的コスモロジーでは、今日、「自然の支配」という考え方が顕著です。ところが、西洋とはいっても古代ギリシアにおいては、自然を対象化してとらえるという考え方はありませんでした。すなわち、「自然」を表わす「ピュシス」(physis)はその内に生命原理すなわち「プシュケー」(魂)をもつ有機的自然を意味しており、人間も神も自然のなかに包含されるものでした。またイスラームでは、「自然」をアラビア語で「タビーア」(tabi'a)と言いますが、その語は「刻印する」を意味する動詞「タバア」(taba'a)から派生しています。イスラームの聖典『コーラン』によれば、創造神アッラーと被造物である自然はたしかに懸隔していますが、イスラーム最大の哲学者と言われるイブン＝シーナー(別名アヴィセンナ 980 - 1037)によれば、自然は「神の刻印」という意味をもっています。そういう有機的自然観がイスラームにもあります。

加藤尚武先生は特別講演において、「天人一体」の思想が東洋だけではなく西洋にもあったと言われました。たしかに、そうした思想はイスラームにも、また初期のキリスト教にもみられました。キリスト教の自然観とその変遷については、シュペネマン先生（同志社大学）が第2回研究会「西洋における自然概念 その歴史と諸問題」において研究報告されました。また、芦名定道先生（京都大学）も第5回研究会「宗教的自然観の多様性からエコロジーへ」において、キリスト教の自然観について研究報告されました。お2人の研究報告によれば、11-12世紀に、人間が農業技術をもつようになってから、西洋の哲学やキリスト教神学において、「自然の支配」という考え方が生じました。西洋において「自然の支配」という考え方が生じた後も、いわゆる「天人一体」の考え方が西洋の文化的コンテクストから消えたわけではありません。機械論的な自然観は11-12世紀頃に生じたのですが、その後、環境破壊が問題になったのは、18世紀の産業革命以後のことです。したがって、このような点から、すでに明らかなように、日本でもよく知られているリン・ホワイト（青木靖三訳『機械と神』、みすず書房、1972年）が提示した見解、すなわち、キリスト教の『旧約聖書』の創造論が環境問題に対して責任を負っているという考え方は、極めて短絡的であると言わざるをえません。

今日、午前中の研究発表や加藤尚武先生の特別講演を拝聴して思ったことですが、現代世界において、科学技術を支えてきたのは自然科学の機械論的な自然観です。そうした科学的な自然観はかなり強力で説得力がありますが、今日、近代科学的な二元論は厳しく批判されています。ここで、私たちが認識しておくべき点は、二元論的なパースペクティブが自然の全体を明らかにするのではなく、自然の部分だけを明らかにするものであるということでしょう。実際、先端科学はすでに単純な二元論を超えて展開してきています。そうした意味では、第4回研究会「自然と人間のつながり 環境問題の現状」において、佐藤孝則先生（天理大学）が環境学の立場から指摘されたように、私たちは自然と人間を分ける二元論的な視点とともに、自然と人間を分けない伝統的な「風土」性の視点をもつことも重要であろうと思います。また、宗教と近代科学の自然観との接点を確保しようとする、芦名定道先生の「自然の宗教哲学」の構想はたいへん示唆に富むものであると思います。

現代の環境問題を解決することは、だれもがよく認識しているように、なかなか容易ではありません。このように地球規模で深刻な問題をほんとうに解決できるのだろうかと不安に思うときもありますが、加藤尚武先生もこの問題は「解決不可能ではない」と言われ

ました。そこで、現代の環境問題の解決へ向けて、私たちはこれまで伝統的に継承されてきた諸宗教の「知恵」をエコロジー研究に生かしていくためにも、宗教倫理学会などの研究討議の場において、宗教間対話を積み重ねながら、東洋と西洋における宗教的自然観の特質をいっそう掘り下げて探究していくことが、たいへん重要になってきています。それと同時に、現代の知的状況において、宗教と科学の継続的な対話をますます推進していくことも、これまで以上に求められています。

加藤尚武先生が最近、出版された著書『価値観と科学／技術』（岩波書店、2001年）のなかで、加藤先生はつぎのように述べておられます。すなわち、「もしも世界の歩みが望ましい方向に向かうとしたら、それはまず自然に対する人間の責任を共有するという倫理性をはじまりの地点とするに違いない」（207頁）。また、「環境問題の認識によってこそ、トータルな未来が見えてくる」（213頁）。加藤先生も指摘しておられますように、私たち一人ひとりがみずからのこれまでの心を大きく転換することが、いま世界全体に求められていると思います。科学技術を使うのは私たち現代人です。現代世界に生きる私たち一人ひとりが、いまさえ良ければとか、自分さえ良ければという発想ではなく、世界的すなわちグローバルにもものを見る、いわゆる「地球人」となる、あるいは、未来からものを見る、いわば「未来人」となる必要があります。環境学では、「地球規模で考え、地域で行動する」（think globally, act locally）とよく表現されますが、私たちはこういうパースペクティブへと、一人ひとりの心を大きく転換する必要があります。そうすることによって、私たちは環境問題に対して共通理解を得て、この問題の解決へ向けて一步を踏み出すことができるのではないのでしょうか。現代人の心を転換するためには、宗教の倫理はたいへん重要であると、私は強調したいと思います。

環境問題の現状において、その問題の解決のために、宗教者あるいは宗教研究者として何ができるのかを考えますと、ほんとうに力不足を痛感いたしますが、宗教者が自然科学者や社会学者さらに人文科学者などとともに、「環境」というキーワードを中心に、それぞれの知見を統合していくことが大切です。そういう状況において、人間存在の本来的なあり方を教示する宗教の倫理が、いまここで、ますます重要性を増してきていると思います。

エコロジーと宗教の関わり

小原克博

(同志社大学)

要点はレジュメの通りですが、今後の議論のポイントを整理したいと思います。先程の加藤先生のご講演で、我々が考えるべきポイントをいただいたように思います。後半で、ハンス・キュンク氏の話を出してくださいました。ハンス・キュンク氏が来京され、加藤先生と中村桂子さんがパネリストになって、京都国際会議場で開催されたシンポジウムには、わたしも聴衆として参加していました。そこで加藤先生の言葉を聞いて「我が意を得たり」と思いました。なぜかという、私がドイツに留学していた頃、ドイツでハンス・キュンクの話聞いたことがあるのですが、そこでも彼は「宗教平和なしに世界平和はない」と語るわけです。ヨーロッパにおいて、その言葉には一定の意義があると思います。なぜなら、世俗化が徹底して進んだヨーロッパにおいては、キリスト教はあまり元気がありません。自分たちは役に立たないのではないかという沈滞した空気の中で、キュンクがそういったことを言ってくると、「我々もひょっとしたらまだ役に立つのかもしれない」という動機付けになるわけです。しかし日本に来て、京都に来て同じメッセージを繰り返えされると、多少なりともげんなりとするわけです。そこで加藤先生が「そんなことをやっていて本当に平和が来るのか」と、そのシンポジウムの中で反論されて、何となく胸がすくような思いをしたことを今も憶えています。

加藤先生のお話の中で、中国での「宗教とエコロジー」の会議に参加して、パターン化された発言があったという指摘がありました。これは中国に限らず、日本でも全く同じだと思うのです。世界的にも見ても大同小異でしょう。「宗教」と「エコロジー」という二つのキーワードを掛け合わせたところに出てくる類型は露骨な便乗商法のようなものがある。とりわけ新宗教、新々宗教の中には、「我々は自然を大事にしてきた」と信者獲得の機会として実に積極的に利用しようとしているものがあります。「我々が古来持っていた自然理解をないがしろにしてきた近代社会はだめだ。もう一度、もとの考え方に立ち返って一緒にこの問題を解決していきませんか」という誘いかけ方は巧みですが、その誘惑的メッセージを健全な宗教者としては拒絶しなければならない部分もあると思います。おそらく、そういった点を加藤先生も危惧されていたのではないのでしょうか。そして、この学会でも同じようなことをやっているのではないかと、というご心配があったのだと思いますが、これま

での研究会ではそういったレベルを超えた、次の段階で議論してきたように思います。

我々ができることは高々知れています。そして困難な問題に立ち向かっていくためには一つの手法だけではだめだということもはっきりしています。技術論だけでも精神論だけでもだめなのです。多様な方法を使って問題にアプローチしていくことが必要です。「宗教を通過しなければ本当の生命観、自然観がわからない」ということを我々は簡単に言うてはならないと思います。本当にそのように言いたければ、より具体的な実効性のある解決方法を提示しなければならないでしょう。

レジュメの中でいくつかポイントを指摘しましたが、第一は「科学的知識と宗教的知恵との関係」です。両者は相反する関係で位置づけられた時代もあります。日本の場合、無関心という時代が長くあったのではないかと思います。澤井先生の話にも出てきました Lynn White, Jr.を、この場に取り上げたのは、皆さんに問題の出発点を知っていただきたいと思ったからです。彼の論文「生態学的危機の歴史的源泉」は、宗教とエコロジーの問題を論じる際に、必ず引用されると言ってもよいほどです。ここで彼の主張の適否を評価することはしません。彼が近代合理主義とキリスト教を安易に同一視している等々、様々な批判がこれまでなされてきました。しかし、大事なのは、彼の問題提起がその後のキリスト教世界においてエコロジーをめぐる議論を活発にしていってきっかけになった、ということです。それ以前は、エコロジーの問題にあまり真剣に向き合ってきませんでした。ようやく 1960 年代後半から 70 年代前半になって、「ひょっとしたら自分たちの歴史に何か間違いがあったのではないか」と省みるようになってきました。

ホワイトはエコロジカルな危機と宗教の問題を指摘し、その解決に関しても一定の宗教的な解決が必要だと言い、エコロジカルな聖人として聖フランシスコの名前を挙げています。ただし、いかなる宗教といえども、それが持っている教えや伝統だけで問題解決することはできません。ある特定の宗教の伝統的自然観に立ち返ったところで、我々現代人の罪責感を一時的に癒してくれることはあったとしても、根本的な問題解決にはつながっていかないでしょう。それどころか、伝統に安住することによって、かえって問題の本質を隠蔽することにもなりかねません。もし、少しでも具体的な問題解決を求めるなら、複数の宗教の知恵を持ち寄って、何ができるか、できないかということを冷静に考えていった方がはるかに現実的です。同時に、自らの伝統に対してはそれを売り物にするより、それに対して批判的な考察を加えていくことの方が、よほど生産的な議論を起こすことができると思います。

レジュメで二番目にあげたのは、今日の環境倫理学の中で一つのトピックスになっている「世代間倫理」についてです。未来社会に対する責任をどう考えるか、という点について、広く共有できるような論理的な基盤を我々の社会は、まだ持っていません。しかし我々が今の生活を優先するあまり、さまざまなリスクを未来世代に結果的に押しつけていっていることは事実です。不利益を一方的に後の世代に先送りしている状況があります。今生きている現在の世代における「共時的」な倫理を考えるだけでなく、我々が死んだ後、どうなっていくかという「通時的」な倫理が必要とされています。世代間倫理の形成は環境倫理の難問の一つに数えられることもあって、宗教的な知恵を使って、簡単な結論を出すことは到底できません。ただ、何か手掛かりを探していくとすれば、東アジアやアフリカなどを中心に、世界に広く見られる祖先崇拜やアニミズムを新たな形で再解釈していくことから、何か問題解決のきっかけが生まれたいだろうかと思います。祖先崇拜もアニミズムも、近代の歴史の中では「前近代的なもの」として廃棄処分にあってきたものです。キリスト教の宣教師がアジアの各地に宣教を始めた頃の記録が比較的多く残っています。それらによれば、宣教師たちが最初にやるべきことは、土着の文化の中にある祖先崇拜、アニミズム的なものを人々の心から追い払うことであり、そうしてはじめて、キリスト教の精神を注入していくことが可能になると考えられていました。アニミズムに対する闘いは、キリスト教の歴史の中では、すでにアウグスティヌスの時代から始まっています。

それに対し、アジアやアフリカでは、いまだに祖先崇拜やアニミズム的な自然理解が抜きがたく存在しています。近代精神によっても、簡単には駆逐されないほどの根の深さを持っているということです。そうした現実を無視して、より近代的なコンセプトで問題解決を図ろうとするより、むしろ、いまだに根強く残っている考え方に視線を向け、その根深さの底にあるマグマ的なエネルギーに触れた方が、新しい発想を生み出す助けになるのではないかと考えています。ただし、これには慎重な議論も必要で、旧来の祖先崇拜などを無批判に取り上げてしまうと、男性優位の家父長制度や、「家」制度に代表される封建主義を復活させることになりかねません。そのような懐古主義に陥るのではなく、時代を縦断するようなコンセプトを引き出し、ひいては世代間倫理の形成に役立つ要素を見いだしていくべきなのです。

こうした課題を皆さんと一緒に考えていきたいと思います。これで私の発題を終わります。

質疑応答

司会 どうもありがとうございました。お二人の発題に対してご意見、ご質問を出していただきたいと思います。

質問 奈良から来ました。このテーマに関心を持って追いかけていますが、あまりにも哲学の声が聞こえてこない。京都地球環境会議が開かれていた時、あるフォーラムがあり、アジアの技術



者を集めて最後にアジアには儒教のネットワークという思想があった。もう一つはクロボトキンの相互宇宙論を持ち上げて、こういうものが見直されるべきだと。主催の新聞社ではまとめの部分がすべてカットされていました。生活の中で工夫をしているという項目だけ並べる。それが客観的だと思っている今の媒体の現実です。私自身に伝わってこない。目的を持ってやっている人間に情報が伝わらない。

もう一つは科学技術振興財団の重点的領域としてナノテクノロジーのシンポジウムで物理の研究者、これは哲学に近いと思っている。しかし文学部の哲学の方と言葉が通じない。それをどうすればいいか。サンスクリットの古代の言葉がインパクトを持っている。奈良でサンスクリット学者と一緒に講演会を主催した時、意味はわからないが、そのポテンシャルに喚起されました。音楽に限りなく近い。ジャワのガムラン音楽であるとか音楽の効果を大事にしたい。今、曖昧な癒し系が流行っていますが、仏教の場合はサンスクリットを一般の人々と学ぶ機会をつくれなにかと思うのです。クロボトキン自身も社会主義になって否定されたわけですが、逆に見つめ直されるべき時ではないかと思います。

澤井 これまで前近代的であるとか、もう古いとされてきた伝統的な東洋思想を再評価すべきであるというのは、私もそのとおりだと思います。私もインド思想を少し研究しておりますが、サンスクリット語には韻律 (metres) とよばれるものがあります。長短の音節からなる韻律の音調、すなわち、ある種のメロディーでもって韻文を読みますと、その内容が覚えやすくなります。そのことが直接、いわゆる癒しとどのように結びつくのかについては十分な検討が必要ですが、いま言われたことは、聖典の言葉が神秘性すなわち深層的な意味をもっており、日常言語と違っていることをみずから体験されたのだと思います。

聖典の言葉のある種々のメロディーをともなって暗唱し、それを繰り返し読誦するというこ
とは、東洋の宗教伝統にも西洋の宗教伝統にもみられます。たとえば、インドにおいては、
ヴェーダ聖典が暗唱され、長年にわたって口頭伝承されてきました。また、イスラームの
聖典『コーラン』の読誦には、ある種々のメロディーがともないますが、イスラーム教徒の
なかには、たとえ聖典の一部分であれ、その言葉を記憶している方が多いといわれます。
現代の宗教学においても、聖典の「口述性」(orality) がたいへん注目されておりますが、
その点については、もっと掘り下げて研究する必要があると私は考えております。

佐藤 天理大学です。お二人の先生の共通するところは、東洋的なという枠組みを設定さ
れていますが、宗教的な自然観を掘り出す作業が必要だということは確かにあると思いま
す。さてそこで宗教倫理学会がこれから進む方向の中で、その部分をどう咀嚼しながら進
んでいくか。ご意見を伺いたいと思います。

西洋でもケルトとかノルマン系の宗教、もともとの民族が持っていた宗教の掘り出しや
伝統的なギリシャ宗教から拾いだしてくる作業の接点の中で、より深化させていく、深く
掘り下げていく発展を期待しております。ぜひその可能性を探っていただきたい。前向き
なご意見をいただきたいと思います。

司会 研究プロジェクト委員会でルールを敷く役割ですが、まず現代の問題について正確
な知識を得ることを目的にしています。歪んだ知識では対応の仕方が誤る。先端医療の問
題でも素人では追いつけないほど難しい問題ですが、できるだけ正確に吸収していきたい。
いきなり宗教の立場を振りかざさず、まず現代の問題を理解する。これが我々の学会の基
本的態度だにご理解いただきたいと思います。

花岡 私自身、既成の意味での宗教を一切考えておりませんで、心や内面性、霊性とか、
新興宗教から原始宗教、すべての宗教に共通する言葉を求めていかない限り、テロにして
も報復にしても永遠に続いて終わらないのではないかと考えております。宗教の面につい
てもわかりきっているということではなく、長い歩みの中で一步一步進めていただければ
ありがたいと思います。

第二次世界大戦中、ドイツでも日本でも宗教者が権力にしたがい、無言でいるくらいし
か何もできなかったという事実がございます。どれだけその時、宗教者は弱肉強食にした
がっていったかということは痛いほど、よくわかっております。それほど宗教は弱い。た
だ一瞬一瞬に自覚はできないが、永遠に向かって本当のものが開けていく。不連続と連続

の中を一步一步歩めたらという希望を持っております。希望を一言述べさせていただきます。

司会 現代の問題について、宗教が今まで対話してこなかった。宗教間の対話になると必ず教義の優劣論争になる。この学会のメリットは現代の問題が共通語になるということです。そこに大きな収穫があったと喜んでおります。

新井 相愛女子短期大学です。宗教的自然観～東洋と西洋で、西洋では自然の支配の思想が特徴的であると。しかし古代のゲルマン、ギリシャやシェイクスピアの作品を見ても自然との調和という思想はあるわけです。東洋と西洋と対比させるよりも、現代の問題は現代文明の問題そのものであると思うんです。それ以前、人々が神々と共に生活を楽しむというのは東洋、西洋に限らず、あったと思うんです。東洋と西洋をいつまでも比較しないで、現代文明の病巣をもっと掘り下げていく方が、この問題の解決につながるのではないかと思います。

澤井 そのとおりであると私も思います。西洋中世のキリスト教において、11 - 12 世紀に人間が自然を支配するという考え方が生じたとはいっても、そうしたキリスト教の考え方とともに、キリスト教以前のケルト文化やゲルマン文化、またギリシア・ローマの文化にみられる自然との調和の思想が、西洋文化の基層において伝承されてきたことも事実です。その点については、近年、宗教学や民俗学などの研究によって明らかになっています（たとえば、植田重雄『ヨーロッパの祭と伝承』講談社学術文庫、1999 年を参照）。つまり、東洋の宗教的自然観には、自然に対する親密さを示す思想があるが、西洋の宗教的自然観には、そうした思想がまったくないというわけではありません。

ただし、現代の環境問題を検討するために、東洋と西洋の自然観を思想レベルで対比することによって、両者の特徴をよく理解しておくことも大切であると思います。西洋の宗教的自然観を思想レベルでとらえると、「自然の支配」という考え方が、中世キリスト教神学のなかで、ひとつの顕著な枠組みとして形成されました。研究会のなかでも、いまご指摘のあった意見もありましたが、ここでは、公開討論の論点を提示するという意味から、従来の「東洋と西洋」という分類の仕方をしたわけです。たしかに、東洋と西洋の宗教的自然観には、両者に通底している自然と人間との関わり方が、民間習俗あるいは庶民信仰レベルで根強く伝承されていますし、それは古代から現代にいたるまでみられます。そういう考え方については、今後、宗教倫理学会が現代の環境問題をめぐって、「人間とは何か」

あるいは「自然とは何か」について掘り下げて明らかにし、研究成果のひとつとして、現代社会へ向けて発信していけるのではないかとも思います。

小原 これまでであれば、東洋と西洋を比較すれば、東洋の優位論の方が多かったと思います。しかしそういう立場を我々は取ろうとしていません。あくまで思想の特徴の比較をベースにした上で、東洋と西洋を超えた問題を考えていきたい。それに関しては東洋か西洋かという枠組みにこだわっているわけではありません。

シュペネマン 小原先生も Lynn White, Jr.の論文を採り上げておられました。自然破壊問題はキリスト教と関係がある。責任がある。このコンテクストを見ないといけない。1960年代、70年代、ヨーロッパでどうして自然破壊が起こったかということが初めて問題になり、それを理解するためには自らの歴史を遡った。どういう考え方があるかという自己反省的な意味で自分の歴史を調べたわけです。そこで確かに一つの大きな原因はキリスト教の創造思想の理解だと。この説は、ヨーロッパ内の自己反省的な立場からすると意味があるわけです。

西洋はこうだ、東洋はこうだということは意味がない。歴史的には当然なことに、ヨーロッパにもいろんな自然の概念があります。ゲーテもシェイクスピア、ローマン派も自然の概念がある。自然科学の背景にあったのは確かにある程度までキリスト教的な影響です。これは一つあります。これを忘れると、最もつまらない全然意味のない比較宗教学、比較文化論になるわけです。これは第一のコメントです。

もう一つのコメントは、加藤先生が「宗教がなくてもエコロジーの問題は解決できる。解決しなければならない」と。確かにそうです。私もそう思っている。学会の委員であるにもかかわらず、そう思っている。と言いますのは、我々は今、宗教は一つの包括的な観念体系として説明していますが、それぞれの宗教は違うわけです。これはいいことだと思います。神道とキリスト教と新宗教、新々宗教の世界観、自然観、人間観は違う。我々が今、間違っているのは、共通な人間論とか共通の超越者に関する考え方を求めていることです。これは必要なのか、また意味があるか。現実的に考えますと、世界は進んでいるから、どうしても解決しなければならない問題があるわけです。そこでまずいろんなレベル、国際的なレベル、国内レベル、消費レベル、文化のレベルで区別する。それを担当する生活分野、学問の中に科学、社会、経済学などがあります。しかしその宇宙は宗教は一つです。100年前、宗教は、場合によっては、一般妥当性を持って皆が信じているとしてきま

した。今、「宗教は社会学、政治学のコンサートの中の一つの声ですよ」ということです。そう考えますと、問題の overlapping consensus はどこにあるか。将来に対する、次世代に対する責任は確かに大きな課題です。ところが各宗教の立場から、自分たちの伝統の中にある考え方を、そこにどう生かすことができるか。まずは自分の信者に対してということですよ。次は一般に通じるように、場合によっては具体的な政策に置き換えることができるようにする。そのために共通な世界観、共通の自然観などは必要ないと思います。具体的な問題を考えると宗教はまだ可能性があるということです。まず各宗教の立場から考え、具体的にどういうことが、そこで言えるかということだと思います。

司会 シュペネマン先生は2回目に「キリスト教の自然観」で研究発表をしていただきました。

佐藤 今の先生のご意見とむしろ逆の視点からの意見ですか、今日、いろんな面でいろんな宗派、宗教だけではなく、どこが違うのかというところに重点が置かれていたように思います。「君と僕は違うか」という点です。私は生物学ですから分類します。これとこれはどう違うか。別種なのか同種なのか。しかし分けるという視点ばかりでいきますと「違う」というところに視点が行ってしまう。そこから最大公約数をいかに探していくか。どこが違うのかということと同時に同じものを探していこうと。人間として同じじゃないか。生命体として同じじゃないか。人間だけの問題ではなく、生き物全体の安全性を考えていったらいいか。まさにその部分だと思います。生き物として同じもの、DNAの中で4つの塩基がずっとバクテリアから同じ単位を持っているという事実を知ることから、生き物との一つのつながりを考えることができると思う。違いばかりではなく、どこが同じなのか、最大公約数を探していく。ケルトの話とか西洋にもいろんな考え方がある。東洋と同じようなものがあるはずだ。同じものを探し出していく視点も必要ではないかと思います。私の意見です。

小原 私の理解は最大公約数を探す、共通の概念を探すということで、エコロジカルな問題に対する有効な解決方法になるのであれば、やってしかるべきだと思います。しかし今まで宗教間対話が試みられてきて、同じキーワード、わかりやすい言葉を挙げて対話してきたのですが、あまり実りのある成果を生み出してこなかったのではないかと、という一つの疑いがあるんですね。「生命」という言葉をキーワードに全部括れるのではないかと、普遍的な概念としてあるのではないかとこの言葉自体、極めて多義的

で安易に共通項として設定することは、かえって問題のリアルな複雑さを見過ごしてしまう可能性もあります。普遍的なものを求める欲求は宗教者の中にはとりわけ強いと思いますが、我々の時代はそういう幻想が壊れている時代であることを認めて出発した方がよいのではないのでしょうか。「生命」という大きな物語が壊れ、個別の物語だけが散在しているようは状況です。その状況の中で我々は呻吟していると思うのです。ですから、一気にすべての人を括って一まとめにできる概念を掴むのはしんどいのではないかという気がいたします。

岩滝 大阪電気通信大学です。シュペネマン先生がおっしゃった意図は今後の僕の宗教倫理学会に対する方向性に対する期待も込めてのコメントになると思います。具体的なテーマの大切さをおっしゃったと思います。エコロジーという大きなテーマを掲げるのではなく、具体的な事例をもとにして、それにすべての宗教が迫っていくことを考えることかなと思います。自然破壊の問題で、日本において在日米軍が爆弾を撃ち込んで山を崩していったり、力を持ってアフガンに行く。名護に生態系を破壊するような環境破壊を強行しかねない基地を持ってこようとする。具体的なテーマに則して迫っていった場合、経済学者、政治学者の多角的な視点で見えていく。自然科学の視点もある。そのことによってエコロジーと自然科学の視点だけで追求することで誤魔化される、欠落させられるということではない方向性に向かうのではないか。その上で共通に自然破壊を止め、平和の問題に貢献できる。具体的なテーマをもとにすれば各宗教の貢献の仕方がもっと一つのテーマに向かって追求できるのではないか。シュペネマン先生がおっしゃったようにエコロジーという枠で括る東洋と西洋の比較の虚しさにつながるのではないかと思います。芦田先生が第5回目の研究会で「社会学者のスペシャリストの参加の必要性を今後出てくるだろう」と。その問題とからめて今後の方向性を期待も込めて意見を述べさせていただきました。

西川 各宗教の違いをこの場で理解しあうことでいいのではないか。違いは違いであって、その中で最大公約数、共通の基盤になるものがあればそれでいい。忘れてならないのは単に学会の中での議論ということではなく、我々は常に社会に向けて、宗教に関心のない人、無関心の人たちにどうやって今回のテーマであるエコロジーを、この学会として少しでもわかりやすい言葉で語りかけ、理解、関心を持ってもらうかが大事ではないかと思います。

小原先生の「家」の話について。東アジアはともかく日本において家というのは現在あるんですか。少なくとも核家族と言われていますが、核家族事態が崩壊しかかっている。

その中で、過去、現在、未来に渡る世代間のつながり云々はむりがあるのではないかと思うんです。先生のお考えになっている家はということかお伺いしたいと思います。

小原 最初の指摘はごもっともです。今、すぐ社会に発信できる具体的な提言はできないと思いますが、「このテーマを学会として消費しました」ということではなく、きちんと議論を見つめた上で、公共的なベースで表現していきたいと思っております。

2番目の点、家をどうとらえるか。家族をどうとらえるか。場所によっても個人によっても違いますから、現代社会において家にどういう共通理解があるかというとは成り立たないと思います。核家族というのが生活の支配形態になっているような都市部もあれば、古くからの家に縛られて生きている地域、生活空間もまだまだ日本には根強くあると思います。ここでは家の形態の社会学的な分析ではなく、そういう家がモデルとして持っている可能性を抽出することが大事であって、現代にどう有効に機能しているか、または破綻しているかということ、ここで論じたいわけではありません。日本の中に限定せずに広く考えた方が、類型性が見えてくるかと思えます。

花岡 共通点を求めていくか、分析的に各々を見ていくという両方が必要だと思います。ケースバイケースに傾くことはありますが、分析してしかわからないことと、統一が常にないとわからないこととか事柄によって違いますので、両方やっていただければと思います。

一つ、1999年、WHO世界保健機関では、あまりにも世界に宗教性が皆無なので「霊性ということの世界中で考えてくれないか」ということが提案されました。10年以上、奥村神父様が日本から行っておられますが、花園大学など天竜寺を中心に、実践的にお坊様と神父様が交換で10人ずつ、今年は日本で、来年はヨーロッパで、修道院と僧堂で霊性交流もあります。共通項がないと世界はだめになるということで、そういう大きな世界的な運動もあるということです。

小原 WHOで spirituality という概念が新たに条文の中に提起された経緯はあると思います。イスラーム圏からは厳しい批判がありました。むりを押す形で採択に至ったわけです。共通の言葉を探すことに反対はしません。そういう努力は必要だと思います。しかし個人的な感想ですが、spiritual、spiritualityと言われた時、薄味すぎて、おいしくないという印象を持ちます。希釈された概念とでも言いましょうか。そうでなければ共通になりえないわけですが、もっと我々を奮い立たせてくれる、味を濃縮された一口飲んだらグツとくる

ような焼酎のような概念が必要ではないかという気がします。それは魔術的な言葉かもしれない。しかしそういうものがなければ人間の精神は活性しないわけです。我々は一般的にはグローバル化時代の中で普遍性を求めてしかるべきですが、他方、固有の伝統の中で根ざしている言葉に対するこだわりも、捨てるはいけないのではないかと考えています。

澤井 シュペネマン先生はキリスト教のコンテクストにおいて、近代科学が生じ自然破壊の問題が生じたのであって、キリスト教と自然破壊の問題は関係があると言われました。その点と関連して、今日、批判されている近代科学の機械論的自然観を乗り越えるためには、主客分離という従来の科学的な枠組みではなく、その枠組みを超えた主客非分離という枠組みが、先端科学では探究されています。そうした発想は、すでに東洋における華嚴思想や中国思想などにみられます。その点について、清水博先生（生命関係学）は自然科学の最先端において、華嚴思想などの東洋思想に触れながら「自分の拘束条件を自分自身で生成するホロンコンピュータ」の原理を明らかにされ、科学を「主客非分離の世界」にまで拡張しようとしておられます。また、近代科学的なパラダイムの再考とともに、そのパラダイムの超克が模索されている今日、河合隼雄先生（臨床心理学）や村上陽一郎先生（科学哲学）は、従来のパラダイムの反省から、西洋思想とともに東洋思想をもっと深く理解することの意義を説いておられます（たとえば、河合隼雄『対話で探る「新しい科学」』講談社 文庫、2001 年を参照）。ともあれ、東洋思想のなかに、従来の機械論的な自然観を乗り越える思想の可能性があるのではないかと、私はこれまで考えておりますが、その点について、加藤尚武先生はどのようにお考えでしょうか。

加藤 主観と客観問題で「主観と客観が合一しているのが東洋的だ」という言い方が本当にいいのかどうか疑問に思っています。今のように地球全体の環境破壊に対して、人間は責任を負わなければならない。人間はそこで責任ある態度をとらないといけない。地球全体の汚染という客観的な現実に対して人間的主体の責任が問われているわけです。そこで「主観も客観もありはしないのだ、合一だ」と言われると、責任はどこに行くのだと心配になるんです。ただ人間は自分が客観的だと思っている自然を破壊すると、自分自身の崩壊に結びついてしまうという連環もまたあるわけで、そういう意味では外部の自然が必ずしも外部だけに止まるものではないという認識を持たなければならないという意味では主観と客観の結びつきもあると思います。一般的に主観と客観の合一が正しい。重要な立場だというだけでは明らかに不十分なのではないかと思えます。

シュペネマン ゲーテの自然観はすばらしいんですよ。ローマン派の自然観はすばらしいんですよ。ところがね、その立場からどういうふうにして、今の科学技術が引き起こした問題を解決できるか。今までの科学技術は主体と客体の分裂とか自由の概念、責任の概念も全部入っているわけです。確かに今の歴史を、東洋からとかゲーテとかローマン主義が見ながら反省できるわけです。ところがそこから逃げることはできませんよ。ゲーテとかローマン派の立場に立つことは今、世界を放棄することになるわけです。その問題です。東洋的な考え方をどういうふうにして今の科学技術の問題、公害問題、自然破壊の問題と結び付けることができるかということですか。そういうことですよ。私の家が燃えている時、そこから逃げてお寺か教会に行ってお祈りして生活すれば、それは解決になりませんよ。どういうふうに火事を消すことができるか、その問題ですね。

澤井 私も同じことを言いたいわけです。今日、私たちは深刻な環境問題に直面しており、決して過去へ再び立ち戻ることはできません。現代という時点から未来へ向けて、トータルな未来が見えてくるように予測を立て、「環境」というキーワードを中心に、何ができるのかを考えていく。そのとき、従来の近代科学は、西洋的な二元論的な枠組みによって物事をとらえてきたが、機械論的あるいは二元論的な枠組みによっては、すべてのことがらを説明することができない。すなわち、あくまでもリアリティ全体のなかの部分だけしか説明できないということがわかります。残りの部分については、まだよくわかっていない点がたくさんあります。そういう未知の部分をつらやましていくうえで、西洋的な考え方とともに東洋的な考え方を考慮に入れることも必要ではないだろうか。これまで前近代的なものとして、ほとんど尊重されてこなかった東洋の宗教的自然観のなかにも、現代の環境問題の解決へ向けて、科学技術の知を転換するのに寄与するような思想的可能性があるのではないだろうか。そういうことを申し上げたかったわけです。

環境問題がこのままの状態が進めば、地球環境は大変な危機に瀕することは、だれにもわかっているわけです。ところが、その危機を回避するための有効な合意がないかぎり、生命の危機、地球環境の危機を回避することはできません。あらゆる宗教の伝統的な自然観や近代科学における最先端の知見を統合していくことによって、たとえそれを試みたとしても、すぐさま思うような結果が出てこないかもしれませんが、この問題の解決へ向けて、いろいろな視点から一つひとつ検討していくことが必要であろうと思います。

このように、学問レベルにおける探究も大切ですが、それと同時に、私たち一人ひとりが日々の生き方のなかで、この問題をよく認識して、地道に少しずつ実践していくことも

大切であると思います。「宗教者として、この問題に対して何ができるのか」と問われたときに、自分自身の日々の生活において、精いっぱい、教えにもとづく実践を積み重ねていくとともに、教えにもとづく生き方を社会へ映していくことが肝心であると思っております。つまり、この問題については、学的な探究と日々の自己実践という両面が不可欠であると私は考えております。

司会 この学会ができてまだ1年です。この学会が発足する契機になりましたのは先端医療の問題です。それまでは宗教倫理学会はありませんでした。宗教間の対話も日本ではほとんどありませんでした。この学会が立ち上がり、この1年、私個人では満足しています。大変よい対話ができたとと思います。現代の問題が共通語になっている。宗教間の対話ができたと意味で大変喜んでおります。現代の問題を材料にした対話の中から、何か現代に提言できるものが生まれてきたらと期待しているわけです。いつも研究会で発表していただいた後、現実の問題が出てきて、現実の問題を突きつけられると黙らざるをえない無力な存在であります。しかしそこから何か生まれてくるのではないかと私は期待しております。私自身、内面的にも変革させられたということをし上げて、少々の効果を公言してもいいのではないかと思うわけです。

いろいろな方からご意見をいただきましてありがとうございました。公開討論会はこれで閉じさせていただきます。ご協力ありがとうございました。

宗教と倫理 別冊第1号

2002年10月1日 発行 会員頒布

編集・発行 宗教倫理学会

代 表 瓜生津隆真

発 行 所 602-8580

京都市上京区今出川通烏丸東入

同志社大学神学部 小原研究室

「宗教倫理学会」事務局

<http://www.kohara.ac/jare/>